氏　　名	宮本　和也
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　6540　号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	The efficacy of pancreatic juice cytology with liquid-based cytology for evaluating malignancy in patients with intraductal papillary mucinous neoplasm （膵管内乳頭粘液性腫瘍患者の悪性度評価における液状化検体細胞診を用いた膵液細胞診の有用性）
論文審査委員	教授 藤原俊義　　教授 平沢　晃　　教授 柳井広之

学位論文内容の要旨

膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）の良悪性診断における膵液細胞診（PJC）は正診率が低く、有用性に疑問がある。当院では細胞収集の効率化を目的に 2012 年 1 月より Liquid based cytology（LBC）法を採用し、診断能の向上に取り組んできた。
IPMN 良悪性診断における PJC の有用性を検討することを目的とし、2003 年 6 月～2018 年 12 月に悪性 IPMN 疑いにて、術前に PJC が行われ膵切除を受けた 90 人を後ろ向きに解析した。スメア法は 52 人、LBC 法は 38 人に実施されていた。主要評価項目は、LBC 導入前後での PJC の悪性 IPMN 診断能とした。

90 人のうち、43 人（48%）が悪性 IPMN であった。LBC は、悪性 IPMN 診断における PJC の正診率を向上させた（スメア法：56%［29/52］vs. LBC 法：76%［29/38］；P = 0.044）。多変量解析では、LBC 法は PJC の正診に寄与する有意な因子であった（オッズ比[OR]：3.52; P = 0.021）。さらに、LBC 法は、Worrisome features 患者において、PJC の正診率を向上させた（スメア法：66%［19/29］vs. LBC 法：93%［14/15］; P = 0.043）。

LBC 法は悪性 IPMN 診断における PJC の正診率を改善することが示された。

論文審査結果の要旨

本研究は、膵管内乳頭粘液性腫瘍（intraductal papillary mucinous neoplasm; IPMN）の良悪性評価において、膵液細胞診（pancreatic juice cytology; PJC）での Liquid-based cytology（LBC）法の有用性を検討した単施設の後方視的臨床研究である。

岡山大学病院において、IPMN 疑いで術前に PJC 施行され膵切除を受けた 90 人を対象に、従来のスメア法 52 例、LBC 法 38 例の正診率を比較検討した。43 例（48%）が悪性 IPMN であったが、スメア法 56%に対して LBC 法 76%と LBC 法で優位に正診率が向上した。多変量解析では、LBC 法、5 mm 以上の壁在結節、3 cm 以上の拡張した分枝膵管、CA19-9 の上昇がリスク因子として挙げられた。さらに、Worrisome features 症例においては、LBC 法が有意に PJC の正診率を向上させた。

委員からは、海外での PJC の実施についてやスメア法と LBC 法のメリット、デメリット、high-risk stigmata（HRS）で正診率の有意な向上がみられなかった理由などの質問が出たが、それぞれに対して適切な回答が得られていた。

本研究は、悪性 IPMN の診断において、LBC 法が PJC の正診率を改善することを明らかにした点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。